BUNRON
Zeitschrift für
literaturwissenschaftliche Japanforschung
Heft 3 (2016)

江戸期の養生法と川端康成『眠れる美女』、ガブリエル　ガルシア　マルケス　Gabriel García Márquez『わが悲しき娼婦たちの思い出』（*Memoria de mis putas tristes*）

板坂則子（東京）

Abstract

This paper focuses on the erotic and sexual relationship between elderly men and young women as a literary subject in novels by the Japanese author Kawabata Yasunari (1899–1972) and by the Columbian author Gabriel García Márquez (1927–2014) as well as on possible roots and parallels in premodern Japanese texts on medicine and sexuality. The earliest example for texts of this kind is *Ishinpō* 『医心方』 (Prescriptions from the Heart of Medicine, 984), dealing with "correct" sexual practices as a means of prolonging the rulers' life in health.

1　『眠れる美女』梗概

『眠れる美女』は、日本を代表する小説家でありノーベル文学賞受賞者でもある川端康成によって書かれた中編小説である。物語は、深く眠る少女との一夜を老人たちに提供する秘められた宿を訪れる 67 歳の江口老人の、傍らで眠る少女たちの身体を通して追憶される過去の女たちの姿とそこから浮かび上がる妄念が交錯してすすむ。梗概をやや詳しく記す。

（その一）

江口は 40 半ばの宿の女に迎えられて、深く眠る娘が待つ宿を初めて訪れる。その家は崖のはずれに立っているようで、波の音が荒く聞こえた。深紅のびろうどのカーテンに囲まれた部屋には、若く美しく初々しい娘が何も身にまとわずに眠っていた。江口はこの家のことを木賀老人から聞いたのである。娘から乳呑兒の匂いを感じ、その匂いの連想から、かつて自宅で子を抱いて来た江口の乳臭さを嫌がった芸者や、激しい情交によって乳首の周りに血をにじませた愛人を思う。むかし、駆け落ちしたその愛人の娘のきれいなひそかなところは忘れがたく、江口にとって娘の心のきれいさと思われるほど心打たれたが、娘は家に連れ戻されてまもなく他の男の嫁になり、後にただ一度、江口が出会った時には母となっていた。江口の傍に眠った娘の若さがそのような思い出を誘ったのであろうか。江口は宿の女が置いていった眠り薬を飲み、悪夢を見るがすぐに眠りの底に沈んでいった。

(その二)

半月ほど後、江口は又、眠れる美女の家を訪れる。第一回の訪問の翌朝、目覚めた江口は眠る娘を処女だと信じて疑わなかった。娘の乳房は江口をみごもる前の母の乳房であるような感触を与えた。

二回目の訪問時、眠っている娘は「前の子より慣れて」いると宿の女が告げるが、今度の娘は男を誘う妖婦のおもむきのある美しさで、匂いが濃かった。江口は娘の目をさまさせようとあらあらしく体をさぐり、この家の禁制をやぶって交情しようとする。しかしたちまち、明らかな処女のしるしに遮られ、驚いて自分を鎮めた。妖婦のような娘が処女でいたことは、江口には却ってこの家を訪れる老人たちの衰亡を示すみにくさのように感じられた。深く眠った娘はよく動き、江口は肌いっぱいに娘に触れ、その暖かさに恍惚とする。娘は処女でありながらも、まぎれもなく妖婦であった。娘の手肌の匂いは、江口に散り椿の幻を誘った。江口の三人の娘は既に結婚しているが、その末娘の結婚前に椿寺への旅に伴い、いっぱいの椿の散り花を共に見た。末娘は二人の男に愛され、一人に処女を奪われた後すぐに、今一人の男と婚約したのである。その末娘を江口は殊にかわいがっていた。

(その三)

八日後、江口老人は「眠れる美女」の家に三度目の訪問をする。宿の女から「見習ひの子」といわれた少女は 16 歳位の小さくあどけない少女だった。娘と同じように死んだように眠ることに誘惑を感じた江口は、「死んだやうに眠る」という言葉から、かつてナイトクラブからおびき出してホテルに行った二人の子持ちの女を思い出す。女は激しい情交の後で沈み込むように寝入り、「死んだやうに眠つてしまつたわ」と言った。女は外国人の人妻だった。江口が 64 歳、女は 24、5 から 7、8 くらいであろうか、江口にとって若い女との最後の情交かと思った女だったが、一二度の便りの後、連絡は途絶えた。眠る小柄な少女の横で、江口は女が夫の子を妊娠したのだと考えつく。眠る少女の小さな口を覗いて、江口は昔の、14 歳の幼い娼婦との味気ないひとときを思い出す。江口は木賀老人や他の客のこの宿での思いを想像する。老人たちの傍らに眠る少女は、仏の化身のようにも思えた。江口は見習いの娘の小さな体を抱きすくめ、深い眠りに自分も沈み込みたく思う。

(その四)

初冬のみぞれの夜、江口は又、宿を訪ねた。娘と同じ眠り薬を求められるかと問う江口を、宿の女はたしなめ、「この家には、悪はありません」という。待っていたのは、大柄で吸い付くようななめらかな肌を持ったあたたかい娘だった。江口は娘の濃い匂いとあたたかさに誘われるが、この処女の娘を犯せば忌まわしく生臭い匂いになると思い、そう思うこと自体が自らの「老い」の故かと考える。江口は白い蝶の幻を見、善良の象徴のように見える娘の乳首を眺め、自分のしるしとして娘の胸にいくつか血の色のにじむ跡をつけた。翌朝、起こしに来た宿の女に、江口はまたもや眠り薬を所望し、女は顔色を変えて拒んだ。

（その五）

真冬の五回目の訪問では、この宿で一人の老人が頓死し、死体が近くの温泉宿に運ばれて隠蔽されたことを、江口は木賀老人から聞いていた。宿の女は、江口の言葉を受けて、死んだ老人と隣に寝ていても娘は深い眠りの中に在って何も知らないと述べる。その夜の娘は二人おり、一人は「いのちそのもの」のような色の黒い不作法な寝相の十代の娘で、口紅を付けた唇の形を訝しんで拭いてみると思いがけず可憐な唇が現れ、江口は四十年ほど前のある娘との接吻を思い出す。色黒の荒々しい娘を暴力で犯し、この宿との訣別としようかと江口はそそられるが、眠る娘が逆らえないことを思うと、底暗い虚無を感じるのである。いま一人の娘はやわらかく華奢でやさしい色気の娘だった。ひきよせると色黒の娘の野生のきつい匂いと異なるあまい匂いが動いた。江口は「一生の最後の女として」娘を犯そうと考えるが、純潔を奪われた娘の一生の哀しみと傷を思い、心を収めて眠りに入ろうとする中で、「それぢや、自分の最初の女はだれだったんだろうか」と考え、「母だ」と思いがけない答が浮かぶ。江口の病んだ母は江口が十七の冬の夜に、胸をやさしく撫でたとたんに多量の血を吐いて死んだ。二人の娘に挟まれ、江口は悪夢に襲われ続けた。江口が新婚旅行から帰ると、赤い花が家を埋めるほどに咲いている家で母が待っていた。大輪の花から赤いしづくが落ちたことで江口が目覚めると、色黒の娘の体は冷たく、既に死んでいた。呼び出した宿の女は、騒がずにもう一度寝るように勧め、「娘ももう一人をりますでせう」と言い放つ。死んだ娘の体を階段から引きずりおろす音がした。隣室では、白い娘の美しいはだかが横たわっていた。「ああ」と江口はながめた。

2　『眠れる美女』について

『眠れる美女』は 1960 年 1～11 月に雑誌『新潮』に掲載され、翌 1961 年 11 月 30 日に新潮社から刊行された。本稿では、テキスト底本として新潮社刊行本を用いる（Fig. 1, 2）。長々と梗概を述べたが、新潮社本で全 148 頁、一頁 490 字として 72,000 字ほどの短い作品である。

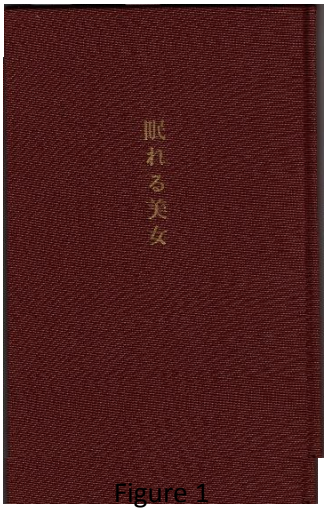

Figure 1

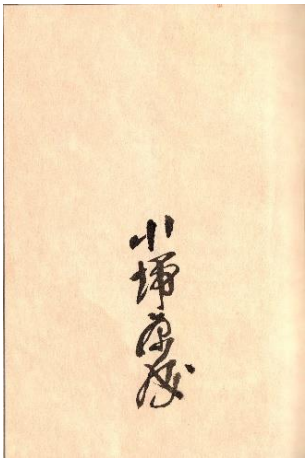
Figure 2

川端といえば、『伊豆の踊子』（1926 年、28 歳）、『禽獣』（1933 年、35 歳）、『雪国』（1935～47 年、37～49 歳）、『山の音』（1949 年、51 歳）と、様々な手法を駆使し日本人の心に潜む美を具現化したことで知られる作者であるが、『眠れる美女』は 62 歳という老年期にさしかかった年に書かれている。日本作家初のノーベル文学賞を受けたのは 1968

年、70 歳の十月のことで、その四年後に自殺によって生涯を終えた。世情一般の評価では代表作として『伊豆の踊子』『雪国』『山の音』などのみずみずしい抒情的な心象が描かれる作品が挙げられるだろうが、この『眠れる美女』は『片腕』（1963 年、65 歳）、『たんぽぽ』（1964 年、66 歳、未完）など、晩年期の究極の「生と性」を描く特異な作品に繋がり、高い評価を得ている。中でも、近代日本文学を代表する作家で川端に極めて近い存在であった三島由紀夫と海外の日本文学研究の代表者であったエドワード・サイデンスティッカーEdward George Seidensticker が、本作を「文句なしに傑作」と呼んだことが、三島による新潮文庫版解説に書かれている。三島は「形式的完成美を保ちつつ、熟れすぎた果実の腐臭に似た芳香を放つデカダンス文学の逸品」[1]と評価し、「その執拗綿密な、ネクロフィリー的肉体描写は、およそ言語による観念的淫蕩の極地と云ってよい」[2]と述べた。近年でも、川端康成の最も綿密な伝記『川端康成伝　双面の人』を著した小谷野敦も又、「川端の最高傑作である」[3]と断言する。このような高評価の作であることから夥しい研究成果が累積されているが、その中で日本古典との結びつきは、第三夜の娘に対しての江口の「してみれば「眠れる美女」は佛のやうなものではないか」という言葉から導かれる謡曲「江口」やそれに因む説話類などが取り上げられているのみのようである。しかし研究論文「『眠れる美女』と古典との関係」で小林芳仁は、論の冒頭に「『眠れる美女』は、いったいどこに日本古典文学との関係があるのかと思われるほど、前衛的な作品である」[4]と書いたように、眠れる年若い美女と老人という結びつきは近現代の日本人にとって、極めて個性的で鮮烈な印象を与えるものと受け取られてきたようである。本稿ではこの、「老人と性的対象としての少女との性交を伴わない関係」が、江戸期以前（19 世紀以前）の日本において広く見られる養生法に繋がることを提示し、その観点から改めて『眠れる美女』とそのオマージュとして作られたマルケス『わが悲しき娼婦たちの思い出』を眺めてみたい。

3　養生法の歴史

『医心方』

古代中国に於いて、男女の交情行為（性交）は何を目的として行われたのであろうか。もちろん生物である人間にとって生殖は重要無比の行為であり、そこに快楽も伴うのであるから、存在意義を云々する必要が伴うわけではない。しかし、生殖年齢を超えても例外的に長く生きる生物である人間にとって、何の為に交情行為をするのかということがかなり大きな問題となったことは想像に難くない。なぜなら、交情行為は最も有意のものであると同時に、人の道から堕落させる最大の要因ともなったからである。なぜ、交情行為を行うのか…　一つには儒教倫理の根幹の一つとなる「孝」、すなわち親を敬い、家を継続さ

1　『眠れる美女』pp. 194, 195（新潮文庫 1967 年 11 月 25 日刊）
2　『眠れる美女』p. 195（新潮文庫 1967 年 11 月 25 日刊）
3　小谷野敦『川端康成伝　双面の人』p. 485（中央公論社、2013 年 5 月 25 日刊）
4　小林芳仁「『眠れる美女』と古典との関係」p. 63（『川端康成研究叢書 9　魔界の彷徨』、教育出版センター、1981 年 5 月 15 日刊　所収）

せるための子孫を残すことが子に課せられた重要な任務であり、その為に交情行為は欠かせないものだからである。では、生殖を離れた性の必要性は何か、それは道教および神仙思想によって培われた養生法としての房中術（交情法）であるとされた。『漢書』（120巻、80 年頃成立）の「芸文志」中に見える「房中八家」、漢代の馬王堆の墓（前漢、B.C. 202―A.D. 8、初期の墳墓）から出土した養生関係の房中書など、古代中国にはこのための房中書の存在が早くから見られる[5]。そしてこれらの養生法としての房中術は、奈良・平安期には日本に伝来し、丹波康頼（912―995）によって編まれた現存最古の医書『医心方』（全 30 巻、984 年成立）では、第二八巻に「房内篇」として集められている。『医心方』は古代中国の数多の医書を用いて編まれ、当時の最先端の医学の総合書として円融帝に献上され、以後、江戸初期まで秘本として朝廷の外部に持ち出されることはなかった。しかし康頼の子孫の丹波氏は、和気氏と共に宮中の医療を司る典薬頭を勤め、『医心方』の内容は医療のみならず風俗や食物、呪術など幅広い分野に取り込まれていった。『医心方』の本文自身は長く秘められ、江戸後期になって版本が出版されたことで、ようやくその内容が公にされる。『医心方』の中で「房内篇」は古代中国房内書の『玉房指要』『素女経』『玄女経』『千金方』等を用いて編纂されたもので、その特異な内容から格別に秘せられたように思われがちであるが、実際には不老長寿への道として、天皇や公家、上流武家の人々に伝えられ多くの影響を与え続けた。

『医心方』巻二八「房内篇」は、以下の様な内容である。なお、『医心方』原本は国宝となっており、ネット上の「e 国宝」で見ることができる[6]。本稿では、本文を版本影印版『医心方　房内篇　原文』[7]によったが、槙佐知子による丁寧な注解[8]が出ており、本稿もこれに拠った。

まず第一章「至理」では、陰陽説から交情行為の根幹を説明する。黄帝[9]の体力減少への対処法の質問に対して、素女[10]は「人ノ衰微スル所以ハ、皆、陰陽交接ノ道ヲ傷レバナリ」（人が身体を損なう原因は、みな正しい性生活をしていないからです）[11]と答える（Fig. 3）。正しい交情法、すなわち「陰陽の術」を得るときは「不死の道也」すなわち不老長寿に導かれるのである。

その方法とは、「多クノ少女ヲ御スルニ在リ。而シテ、数、瀉精スルコト莫クバ、人ヲシテ身ヲ軽クシ、百病ヲ消除セシムル也」（大勢の少女を相手にすることである。そして頻繁に射精することのないようにすれば、男性の身体は軽やかになり、あらゆる病気を除くことができるのだ）というもので、まだ乳房もふくらまない幼い少女を七八人も相手

5　坂出祥伸『「気」と養生…道教の養生術と呪術』（人文書院、1993 年 1 月 25 日刊）
6　http://www.emuseum.jp（検索語：医心方）
7　『医心方　房内篇　原文』（出版科学総合研究所、1978 年 6 月 20 日刊）
8　槙佐知子『医心方　巻二十八』（筑摩書房、2004 年 2 月 20 日刊）
9　古代中国の伝説的黄帝
10　房内術の教えで名高い女仙
11　槙佐知子『医心方　巻二十八　房内篇』（筑摩書房、2004 年 2 月 20 日刊）によって『医心方』原文の読み下し文、ならびに現代訳を掲げる。

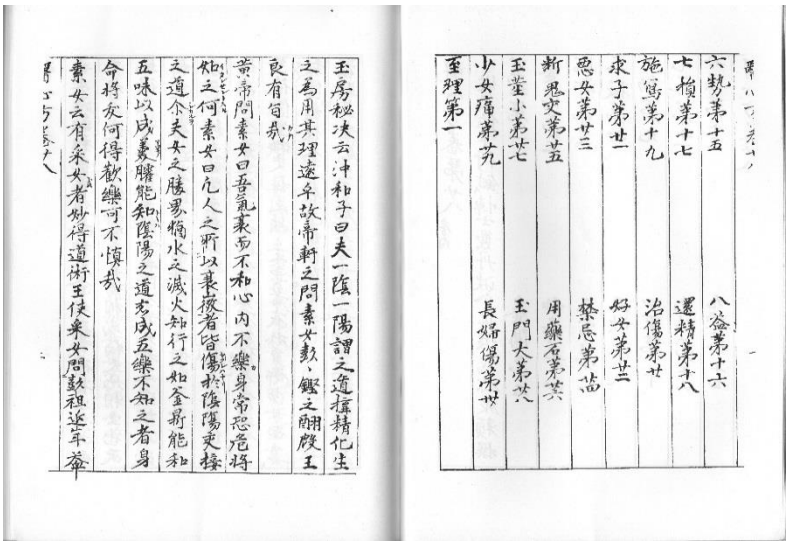

Figure 3

とし、しかも彼女達を瓦か石ころのように見て、自分自身を黄金や玉のように大切に扱うべきであるという、王である男性の養生を目的とする交情法が伝えられたのである。不老長寿を望むのであれば天地陰陽の理に従って房中術を身に付ける必要があり、これが「孝」に並ぶ今ひとつの交情行為の必要理由であった。そして房中術の枢要は、「一夜ニ十女ヲ御シテ、泄ラサザルノミ。此レニテ房中ノ術ハ畢ンヌ」（一晩に十人の女性を相手に性交して、自分は射精しないというだけのことである）という簡単なものである。以下、第二章「養陽」では男性の為の具体的な交情法が説かれ、第三章「養陰」では西王母[12]を例に女性の交情の必要が説かれ、第四章「和志」では男女双方の交情に於ける精神的和合の必要性が書かれている。以下、第五章から具体的な交情法が、九つの体位技法、性器の形状、交情の技法と続き、さらに誤った交情法から起こる病気の治療法、薬石の処方、交接を避けるべき日や禁忌など、さまざまな交情に関する知識が全三十章に分かれて説かれている。この「房中篇」の教えの何よりの特徴は、権力者にとっての交情行動が自らの「養生」を目的としたものとして主張されているところにあり、権力者のほとんどが男性であることから、男性中心の性愛法が教授されている。

『黄素妙論』

この漢文で書かれた『医心方』中の養生法の内容は、16 世紀に曲直瀬道三(1507―1594)によってかな書きの簡便な書として纏められた小品に繋がる。16 世紀後半期の著名な医師であった道三は当時の天皇や公家、上流武家に医療を施し、求められると医書を呈上した。その中でも戦国大名・松永久秀に乞われて「養生」「素女論」（1567 年）各一冊を講授したが、この「素女論」こそ、その後、『黄素妙論』として世に知られるようになった養生書である[13]。『黄素妙論』は当初は写本として流布したが、江戸初期には版本となり、以後、多くの版が出て広く流通した。

[12] 古代中国の神話上の女神

[13] 町泉寿郎「近世日本の医学にみる「学び」の展開」（『日本漢文学研究』第七号、2012 年 3 月刊）

『黄素妙論』は、以下の様に構成されている。なお、『黄素妙論』江戸初期刊の版本本文が国立国会図書館デジタルコレクション[14]で見ることができ、山崎光夫による平易な内容紹介が『戦国武将の養生訓』（新潮選書、2004 年 12 月 20 日刊）に載る。

まず黄帝のなぜ寿命の長短があるのかという問いに対して、素女は「それ養生といつはは飲食の保養、男女の交はり、たゝ此の二にきはまれり」[15]と、養生には飲食と交情行為、この二つが肝要であると答える。そして交合の「秘伝の要術」を述べていく。たとえば女にも情念が起きてから交合すべきであり、女の姪欲の情念が起きている徴候を五つの段階に分けて示し、交合の九つの体位を教え、交情法を具体的に述べていく。その他、交情行為を行う時節の吉凶、交情行為をしてはならない場所、男の年齢による交情回数、交情行為に効果のある薬術を述べて終わる。このように、養生法として交情行為を用いるという根本的な見解を初め、皇帝と素女の質疑に始まり、九つの体位、交情時の時節や場所の吉凶、薬石など、多くの内容が『医心方』と重なるが、これは『医心方』を道三が参照したからではなく、『医心方』の引用元でもあった古代中国の房中書である『素女妙論』を用いて道三が本書を成したからである。道三は本書を「人として陰陽和合の道を知りやすく、婚合のことはりを行なひ易からしめむとするものなり」としている。「陰陽」すなわち「男女」の「和合」を目的とし、それは「男女の陰陽交はり合ひて子孫を生す」「男女の陰陽合はさる時は、人倫滅して子孫絶ゆる」からであり、『医心方』のように帝王の養生法を伝える目的とは異なっている。そこで、たとえば黄帝が「五傷の法」とは何かを尋ねたのに対して、素女は「三に、若く盛んなる女にもし老たる男あひて、玉茎かたからず、なましひにすこしおゆるといひて強ゐてましはり合ひ精汁をもらせは、目を病み遂に盲目となる」と教えており、老人と少女という組合せは本書では推奨されず、男と女双方が和して交情行為を行わない時の害が説かれている。その他、『黄素妙論』では『医心方』に比してより具体的な交情法が説かれており、又、女の交情時の状態についての記述も多く、男性主体の交情行為が説かれているものの、男女の和合、すなわち女性についての知識も多く入れられているところが特徴といえよう。

そして江戸期に入り、この『黄素妙論』は、発生期の江戸期春本と大きな関わりを持っていく。艶笑譚や春画絵巻は平安期から見られるが、江戸期の春画・春本にそれらがそのまま繋がるものではない。春画・春本は、室町末期頃に日本にもたらされた中国春宮画（中国春画を「春宮画」という）に影響を受けて作成され、独自の変化を遂げていったものである[16]。これら中国春宮図と共に春本の思想・内容面に多大な影響を与えたのが『黄素妙論』であった。石上阿希は江戸期春本に於ける『黄素妙論』の取り込みを四期に分けて詳しく論述している[17]。『黄素妙論』の中で示された房中術の数々が色道指南の色合いで用いられていったのであるが、第一期（江戸初期～寛文期）や第二期（貞享～宝永期）には本文からの部分的な知識が『黄素妙論』の書名を載せずに引用されており、第三期（明和～寛政期）には往来物のパロディ春本に取り込まれる。第四期（文化期以降）には

[14] http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541834
[15] 原文のかな文字を適宜、漢字に変え、読点を入れた。
[16] 白倉　敬彦「肉筆春画について」（『別冊太陽　肉筆春画』、平凡社、2009 年 5 月 13 日刊）
[17] 石上阿希「中国養生書と艶本　『黄素妙論』の受容を中心に」『日本の春画・艶本研究』（平凡社、2015 年 2 月 18 日刊）

『黄素妙論』の新版が出て春本にもより詳しく用いられていくと提示されている。これまで初期春本と『黄素妙論』との関わりは既に指摘されていたが、石上の論考によって『黄素妙論』が交情法の指導書として江戸期を通じて、春本と大きな関わりを持ったことが判明する。

『養生訓』

一方、江戸期は、生活全般における養生法を説いた養生書が大量に著された時代でもある。吉原瑛は、江戸期に出された養生書は、総合的に養生を述べたものに限っても 130 部が出され、発行年未詳作や再板作を加えると少なくとも 300 部に登るとしている[18]。その中でもっとも人口に膾炙したのが貝原益軒『養生訓』（8 巻 2 冊、1713 年刊）である。福岡藩の藩医であった益軒は博識を活かし、70 歳以後は著述に専念して数多くの本草書や教育書、養生書類を著した。『養生訓』は益軒 84 歳の著で、中国医書を駆使して作られた。そしてその巻四中に「慎色慾」として「色欲」に対する教えが纏められているのである。なお本稿では、ネット上で見られる版本『養生訓』（1834 年版、早稲田大学図書館、ヤ 09 00705）をテキスト底本として用いる[19]。

『養生訓』は冒頭二巻が総論で、以下、飲食、二便、慎病、要薬、養老、鍼灸など各論が続く。巻四中の「慎色慾」の内容は以下の様なものである。総論では、色欲を欲しいままにすれば礼法に背くのみならず、元気を減らし寿命を短くする元である、飲食・男女は人間の大欲であり、慎むべきものであると、詳細に説かれる。次いで「男女交接」の年齢による度数が述べられ、古代中国房中書『千金方』から細かい解説が記されるが、「孫真人が千金方に房中補益説あり」「其大意は四十以後血気やうやく衰ふる故、精気をもらさずして、只しば／＼交接すべし。如此すれば元気へらず、血気めぐりて補益となるといへる意なり」「四十以上の人は、交接のみしば／＼にして、精気をば泄すべからず」（句読点を補った）と、四十を過ぎた人にとっての房中術の必要性が説かれている。すなわち、年長けた男は女性と多く接するべきだが、精汁を漏らしてはいけないという教えである。そして以下には、交情行為を行ってはいけない時日や場所などの知識、尿意を抑えての房事や、婦人懐胎の後での交合の禁止が説かれ、腎脾を滋養の源として保養に努めて堅固にするようにという言葉で終わる。これらの中で交情行為の年齢による頻度や禁止される場所や事実などは、用いた古代中国房中書が同類であることから、『医心方』『黄素妙論』に等しい。けれども『黄素妙論』のような具体的な交情行為に関する知識が述べられているわけではなく、あくまで「養生」目的の範囲に留まっている。そしてこの『養生訓』が世上で多く読まれたことから、これらの交情に関する禁忌などは、江戸期の一般的な知識として広く普及していった。それら一般的な交情行為に関する知識とは何か、それは交情に関する場所や時日の禁忌であり、そして「交接のみしば／＼にして、精気をば泄すべからず」、すなわち老年期に向かう男性は、俗に言う「接して漏らさず」の生活を送るべきであるという教えであった。この教えは『黄素妙論』に見られる男女和合を中心としたも

[18] 吉原瑛「江戸時代養生書出版年表」（『群馬大学教育学部紀要　芸術・技術・生活科学編』第 33 巻、1998 年 3 月 14 日刊）

[19] http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09_00705/index.html

のではなく、『医心方』に近い男性の養生の為の交情行為という考えであり、江戸期の男たちに大きな影響を与えた。たとえば、『養生訓』は 1834 年の再刊時に杉本義篤（1780―1826）によって付録一巻が付けられ[20]、「養生訓」の大要が纏められているが、その中に以下の記述が見られる。

> 当時浪華に浄瑠璃の名匠あり。名海内に普し。此人性色情を愛して、妻妾数人をたくはへ、八旬に近き今年に至る迄、時時青楼に遊んで多淫を興ず。然るに美音壮年に異ならず、起居また衰へずと。予竊にうたがふ。多房の生命に害あること、水火より甚し。然るに身傷をうけず、上寿を保て美音むかしに異ならず、起居またすこやかなることは、如何なる故たるをしらず。因て其生平の所行を聞に、性好んで多淫を殊とすといへども、唯交接するのみにして、精液をば閉て泄さずといへり。宜なる哉。その寿して身衰へざる事、この人暗に千金方の秘訣を得たりと謂べし。

老年に至っても、多くの妻妾を傍らに置き多淫の生活を送りながらも、精液を漏らすことがなければ健やかさを保つことができる、という実践例を挙げているのである。そして又、早稲田大学図書館所蔵本では、所蔵者によって文章の脇に傍点と○点が付けられている箇所が見られるが、中でも重要と考えられた○点が付けられているのは、「交接を慎み精液を漏さゞるべし」「かたく精を閉て漏すべからず」という二箇所である。さまざまな養生法の中でもっとも大切なのは交情行為に於ける養生法であり、女と交接してその気を身に受けることは我が身の養生に繋がるが、精液を漏らしてはいけない、というのが『養生訓』によって人口に膾炙した交情行為に関する智慧であり、それは決して「放蕩、婬逸の少年」への教えではなく、武家を中心とする重責を担った壮年の男たちの常識であったといえよう。

このように、江戸期の交情行為に関わる知識は、男女和合を目的として具体的な交情法を述べ春本に大きな影響を与えた『黄素妙論』によるものと、やや年嵩の社会的な地位を持つ男性を中心とした養生法としての『養生論』によるものの、二種類によって支えられていたといえる。

「文のはやし」

ところで私はここ数年、江戸期春本を研究対象とし、江戸期に最も多く刊行され、従って多くの読者を得た春本は何か、という問題を扱っている。その結論の一つとして、「文のはやし」型春本を挙げたい。「文のはやし」とは、艶書すなわちラブレターを中心とする春本であるが、一冊の書名ではなく、同型の艶書往来の総称として私が与えた呼称である。「文のはやし」型春本とは、男女の艶書を下段に並べ、性にまつわる具体的な知識や交情行為の指南を伝授する文を頭書として付けた、多くが墨摺のみの中本一冊を定型とする小冊子である。下部の艶書部分は仮名文字主体の連綿体によって記され、上部の頭書部分に故事や知識が盛りだくさんに並べられるが、これは女子用往来文（女性用の教科書）に見られる型に倣っている。しかしこの上部の頭書部分が交情行為の具体的な指南書となって

[20] 本稿でテキスト底本とした早稲田大学図書館所蔵本はこの 1834 年再刊本である。

いることから、「女子用往来文」ではなく、「春本」に分類される。この十年程で私が蒐集した「文のはやし」系春本は約五十部、その他、国文学研究資料館、立命館大学アート・リサーチ・センター、専修大学向井文庫などの所蔵本二十余部を加え、七十余部を「文のはやし」系春本として調査している。書名は「文しなん」「文のはやし」「ふみのゆきかひ」など幾つか見られるが、当時の仕入れ帳や現代の古書展目録などでは「文のはやし」で記載されることが多く、この型の春本の通称として「文のはやし」で通じたものと思われる。春本の中でこれほどの量が一つの総称で扱われるのは稀有であり、現代でも古書店で最も多く目につく春本でもある。刊行は文政中期以降から明治初期に掛けて、すべて江戸の書肆から刊行され、購入した読者は記載された名前から推すと男性が圧倒的に多く、版本に見られる書き入れによると、江戸中心に、大坂、信州や筑前など多くの地方都市にも及ぶ。

これらの「文のはやし」系春本をその内容から十種類に分類して艶書部と頭書内容を纏めたものが表一「上部頭書部」、表二「下部艶書部」である。（付表参照）好色本禁止令が出た後の非合法の書であるので、刊年の明記されたものは第九類とした『艶道文の真砂』の安政三年 1856 のみで、他の刊年はおおよその推量に頼らざるを得ない。けれども第一類とした十返舎一九作（序文）、麿丸（歌川国丸）画（口絵）の『文しなん』（文政六～八 1823～25 刊）がこれら「文のはやし」系の嚆矢となった作と推定される。本書は下部には全９通の艶書が載り、一組の男女の出逢いからめでたく結ばれるまでが並べられ[21]、頭書部分には、『黄素妙論』を大きく用いた交情行為に関わる基礎的な知識が載っている。そして「文のはやし」系春本は、時代が下るに連れて、女子用往来としての型を保ちながらも、徐々に戯作（江戸後期小説）に近い娯楽的な傾向を強めていく。下部の艶書も、一組の男女の恋の行方を追うのではなく、さまざまな恋を艶書から読み解き楽しむ趣向に変わり、頭書部分の交情に関わる知識を与える部分も、男性主体の性的な刺激の強いものになっていくのである。

Figure 4

Figure 5

[21] 一九作『文しなん』の改題と翻刻は拙稿「一九『文しなん』と陽起山人『文のはやし』（附　往来部分翻刻）」（『専修国文』第九七号、専修大学日本語日本文学文化学会、2015 年９月 18 日）に載せた。

Figure 6

そして本稿で問題にしたい第四類は、書名は『艶道通言　ふみのゆきかひ』（以後は角書きを省いて『文のゆきかひ』と表記する）、女好庵主人（松亭金水）著、画師名記載はなく、戯文中心の冊子である。全 46 丁、表紙は藍灰色地に花丸紋が白抜きされているが題簽は欠(Fig. 4)、見返しは藍摺で「艶道通言　ふみのゆきかひ　女好庵主人新編」、1 丁表の序文は紅藍二色の雲形入で序題「艶道通言　文のゆきかひ叙」(Fig.5)。口絵は見開き一面の彩色刷り、石山寺で紫式部が机に向かう『源氏物語』執筆図(Fig.6)が入り、その上部には懸想文売を紹介する正月光景が描かれるなど、男女双方を意識したおだやかな作りとなっている。本文内容は、下部の艶書部は一組の男女の恋を扱うのではなく、様々な艶書を楽しむ趣向で、頭書部分は小挿図入だが春画はなく、多く睦まじい男女を描くおだやかな図柄が描かれている。頭書の内容は「男女和合の事」「年ゆかぬ娘をくどき落す伝」「泣ぬ女をなくやうに仕こむ伝」「大どしままたうばを犯す伝」「子をはらむ説」「老人養生の法」「女を口説でん」「女の書たるものにてその心いきをしる法」「女の閨へしのぶ法」と並び、「文のはやし」本の恒例として冒頭に『黄素妙論』に基づく男女和合の教えが載るが、以下は男性読者に向けての読み物となっている。持ち主による書き入れがある三本には、それぞれ嘉永三年 1850、文久元年 1861、慶応二年 1866 と書かれていることから幕末期の刊行らしく、この時期の戯作に近い娯楽的内容ではあるが、比較的おだやかな「文のはやし」型春本といえよう。

問題としたいのは、この頭書中の「老人養生の法」で、以下に翻刻文を載せる。なお、この翻刻では、原本通りに振り仮名を写しておく。

老人養生の法(Fig. 7, 8)

ある処に七十余の老人あり食物をはじめ万事の養生人並にこえて慎しみよければその年に及びても至つてすこやかにて風いちど引たる事もなく杖もつかず目がねもかけず珍らしき老人なるが年の頃十四五より十七八をかぎりて顔かたちあざやか」（26 丁裏）

妾を三四人おきて日々にたはふれ寝起をもともになしける故人〳〵あやしみ日ごろより心やすく出入する人あるとき老人にとひけるは平生の養生はなか／＼」（27 丁表）

なみ／＼人のおよばぬまで心がけ給へど女の事になりてはそのつゝしみもとゞかぬにや多くの妾をおきてたのしみ給ふさはれ世にいふ如く交合は天地の理なれば年よりても毒にはならぬにやます／＼壮健なるはめでたき事也といへばかの老人から／＼と笑ひいかにもさやうに思ひ給ふは無理ならず」（27 丁裏）

いざ／＼養生の道をかたり聞せ申すべしそも／＼男子は八の数にて二八十六にして経脉つうじ腎気とゝのひ交合すれば子を生ずるなり夫より八八六十四にして経脉たえこれより後は決して交合すべからずと古き書物にもありてわれもわかきときより医道をまなびよくわきまへたる事也」（28 丁表）

しかるに今は七十余におよびて精気おとろへたるによりあの若き女どもを近付て精気をやしなふ助とする也実は十四五六を限りとなり」（28 丁裏）

夜寝るときは左右に寝せてその人はだのあたゝかみをこの身にうけまた折々はかれらが陰門をさぐりうす毛少々はえたるをつまみまた或ときは口を吸てその真液をのみ肌とはだとをおし付てそのあぶらつきたる勢ひをかりるなりかくの如くすれば老木に若木をそえて」（29 丁表）

自然と老木の元気をますなり勿論そのごとくすればとて実の交合をばする事なしこの故に年十五六を限りとする也それより上の女にいたりては陰心ふかくたとへ此方乾物のごとき老人なりとも男なれば肌とはだをおしつけ或ひは口をすひなどすれば女もいつか陰心きざ」（29 丁裏）

して鼻息あらくし身をすり付なンどしてしきりに交合せんことを求む此方たとへ養生の為なりともさやうにされては情合にて殊によりたすけ舟のちからをかりても誠の交合する事あらば命をけづる基なり女のかたより右のごとく持かけず共口をすひ陰門をくぢ」（30 丁表）

りて気をやしなはんとするとき十五六の娘とはまた陰門のやうすもちがひ吐姪うるほひ開中あつくあわだちぬら／＼ずる／＼とするときはいかに慎まんとすると

も時によりてとりはづす事なきにあらずさすれば不養生の第一となるこゝにおいて二十以上のとしまをば決して抱へず」（30 丁裏）

十四五六までをかぎるなり年ゆかぬ娘はロをすはれてもくぢられてもまづ恥かしさが一ばい殊に一義のあぢをしらぬもあり又しりたり共功者も」（31 表）

あらねばはないき荒くしてすり付といふ事もせずじつとして居るのみなればこちらも乗かゝつてとぼさんと思ふほどのはりもなくさきも又してもらはねばならぬといふ仕打もせねば其まゝ抱きて夜をあかすまで也殊にとしよりては火にてからだを焙るは毒なり人はだにてほか／＼と温」（31 丁裏）

むるが養生の第一なり故に年ゆかぬ娘ばかりをおくなりおまへも年をとりたらばかくのごとしくし給へかならず精気をやしなひて無病長命也といはれしとなん実にさもあるべき事にや」（32 丁表）

Figure 7

Figure 8

一読して、『眠れる美女』で江口老人が訪れる宿での娘との一夜の相似に驚かれるのではないだろうか。もちろん、川端がこの一文に誘引されたなどと強弁するつもりはない。しかし、目にした可能性がまったくないとも言い切れない。なぜなら、この第四類『文のゆきかひ』は幕末から明治に掛けての流行書と見られ、私は９部もの書を手にしているからである。そして又、この一文そのものはさておいても、「老人と性的対象でありながら性的交渉を持たない年若い娘」という組合せが、江戸期の養生書に端を発して、広く共有されていたイメージであり、川端もその知識を持っていたであろうことは諾われるのではないだろうか。

4　養生法から見た『眠れる美女』

「老人と性的対象でありながら性的交渉を持たない年若い娘」の組合せが『文のゆきかひ』で推奨されたのは、「精気おとろへた」老人であることから、「若き女どもを近付て精気をやしなふ」為であり、「人はだにてほか／＼と」体を温めるのが「養生の第一」で、このようにして若い女から気を取ることで、老人は「精気をやしなひて無病長命」を得られる養生法にかなったことだからである。一方、『眠れる美女』では、江口老人以外の老人が若い女と共に一夜を過ごすのは、「娘のはだいつぱいにつつまれ」た老人が「われを忘れる」という「若い生のめぐみ」を受ける、つまり「眠らせられた娘から若さを吸はう」とするからであり、これも又、古来の養生法に則っている。「少女のはなつ香気を不老長生のくすりとしようとした老人がむかしからあつた」（p. 108）という老人（仙人か）の具体的な出典はいまだ見つけられないが、「不老長生」に繋がる説話に興味を持った川端にとって、少女と老人の組合せが突飛なものであったとは思えない。

それでは養生法にかなう為に「若き女」との交情行為そのものがどのように忌避されるかというと、『文のゆきかひ』では、妾でありながらも、「年ゆかぬ娘」は性的未熟さのゆえに老人から何をされても「じつとして居るのみ」で、老人を交情行為に向けて奮い立たせることがないからである。対して『眠れる美女』では、娘たちは老人に裸身を差し出している上に、「絞め殺されても、目をさまさない」ような深い眠りの中にあり、何をされても逃げられないのであるが、老齢の客たちは自ら性的な交わりを行うことはもはや不可能だからである。ところが、『文のゆきかひ』でも『眠れる美女』でも、主人公の老人や江口老人はいまだ男性としての交情行為を行い得る肉体をもっている。しかし『文のゆきかひ』では、老人は交情行為を行うためには女からの能動的な助けが必要であり、それができない年ゆかぬ妾を相手にしている限り交情行為は妨げられ、「年ゆかぬ娘」は老人の養生になっている。一方、江口老人は、「若い女とのまじはりの最後」と思ったのは三年前、江口 64 歳のことであるから、それからかなりの年月が開いているものの、「その時の自分の気持しだい、場所しだい、また相手によ」り、性的な関心を持ち続けている。宿のうら若い「眠れる美女」は、近代以降、心的内面を最も直截的に反映する器官とされている目を開けることはなく、したがって江口との精神的な交情は鎖され、ひたすら見られる対象物としてのみ機能する存在である。江口が娘を性的な視線で捉えようとするならば、横たわる娘の肉体を通して自ら「妄想や追憶」を掻き立てることでのみ、交情可能となる身体を抱えているということになろう。

このような江口が妄念を掻き立て、死んだように眠る娘を「眠れる美女」と美化していく為に用いたのが、「きむすめ」（処女）という装置である。『眠れる美女』の中で言挙げされる「きむすめ」という言葉は、眠る娘たちの場合、「きむすめであらうと信じると疑はなかつた」（第一夜の娘）、「娘の目をさまさせるために江口はあらくあつかつた。ところがしかし、たちまち、江口は明らかなきむすめのしるしにさえぎられた」（第二夜の娘）、「それにしてもきむすめばかりを呼んであるらしいのは、この家のどういふ心づかひなのだらうか」（第四夜の娘）、「やはり、きむすめなのかなと江口は思つた。この家での第二夜のむすめに疑ひをおこして、自分のさもしさにおどろき、悔いたので、しらべてみようとする気はなかつた」（第四夜の娘）などと、使われている。対して眠る娘た

ち以外の場合は、たとえば江口の末娘が二人の男に執着され、男たちのあらそいの中で「末娘はきむすめでなくなつ」た時、そのことが引き起こした娘の変化に気づいた母の問いかけに「娘はさうためらはないで告白し」ており、末娘がきむすめでなくなったことは本人の言葉から明確である。一方、眠る娘たちは果たして、きむすめであったのだろうか。第二夜の眠る娘が見せた「明かなきむすめのしるし」とはどのような事態が起こったのであろうか？殺されても目覚めない娘がたちまちに示すきむすめのしるしなど、あり得るはずもなかろう。眠る娘たちが「きむすめ」であるのは確定されたことではなく、江口の想像でしかない。そして「きむすめ」という存在は、たとえば大学を出たばかりの若い江口が愛人の「うひうひしい娘」の「ひそかなところのきれいさ」を見た時に「きれいさに息をのみ涙が出るほど打たれ」、それが「老年の今なほ動かせない強い思ひ出」となっているのは、その娘の「きむすめ」の証（あかし）だったからであろう。対して末娘の処女喪失については、「さういふ場合の娘の姿恰好のみにくさ」を思い浮かべて「はげしい屈辱と羞恥におそはれ」ている。江口老人がもし眠る娘を犯せば、娘からは「いまはしくなまぐさいにほひがする」。江口にとっての「きむすめ」は聖性の証であり、それだけで犯すべからざる存在となっていくのである。「眠れる美女」の若さが尊重されたのではないことは、三人目の見習いの「眠れる美女」であるあどけない娘よりもなお幼い十四歳の娼婦の思い出からも顯かである。三島由紀夫が「「眠れる美女」論」にいう「「処女崇拝」の主題」[22]が、このように用意されている。

江口の目前で深い眠りの中にある「きむすめ」はその結果、「娼婦のきむすめ」(p. 52)というアンチノミーを一身に纏った存在になり、江口老人の女にかかわる「妄想や追憶」を限りなく呼び起こしていく。眠る娘たちを、江口は実際にはどのように扱ったのであろうか。『眠れる美女』は、「たちの悪いいたづらはなさらないで下さいませよ。眠つてゐる女の子の口に指を入れようとなさつたりすることもいけませんよ」（p. 3）という宿の女から発せられた言葉で始まる。しかしながら、性的に男でなくなっても、「娘をくまなく愛撫」し「はだかの美女にひしと抱きつ」く老人たちにとって、どうして「口に指を入れようとする」のが許されないような「たちの悪いいたづら」なのであろうか。そして物語では、この眠る娘たちの体の何処よりも、その唇に触れる江口の愛撫が多く描かれているのである。たとえば三人目の小さな見習いの娘には、「幼なじみた舌のまんなかに可愛い窪みがとほつてゐる」唇に江口は誘惑を感じ、「娘の鼻の下やあごに手をかけて口をふさがせた」りし、「娘のつぼんだ唇にそつと唇をつけた」。四人目のあたたかい娘は、「舌唇のまんなかをつまんで少し開いて」みたが、江口の指先は娘の口紅で赤く染まる。五人目の黒い娘は、ハンカチで唇を拭き、現れた「上唇のきれいな山形」にそそられて唇を触っている。もうすぐ死が訪れるこの黒い娘に対して、江口は「「おや、可愛い八重歯だ。」と老人は指でその八重歯をつまんでみた。大粒の歯なのにその八重歯は小さい。娘の息がかかつて来なければ、江口はその八重歯のあたりに接吻したかもしれなかつた」（p. 145）のである。そして、最も強い愛撫を与えられた唇は二人目の娘である。江口は人差し指の爪先で娘の歯に触れ、「老人の人差指は娘の歯ならびをさぐつて、唇のあひだをたどつていつた。二度三度行きつもどりつした。唇のそとがはのかわき気味だつたのに、

[22] 三島由紀夫「「眠れる美女」論」（『国文学』15-3 号、1970 年 2 月刊）

なかのしめりが出てきてなめらかになつた。右の方に一本八重歯があつた。江口は親指を加へてその八重歯をつまんでみた。それから歯のおくに指を入れてみようとしてが、娘のうへしたの歯は眠りながらもかたく合はさつてゐてひらかなかつた。江口は指をはなすと赤いにじみがついてゐた。その口紅をなにで拭き取つたものか」（pp. 50, 51）と、江口は逡巡する。この娘こそ、江口が「娘の目をさまさせるために」荒く扱ったところ、「たちまち、江口は明らかなきむすめのしるしにさへぎられた」娘なのである。江口はこの娘にどのような行為を行ったのであろうか。明らかに『眠れる美女』では、唇は女性器の暗喩として描かれているのであり、江口は眠る娘たちの体をまさぐることで、自らの「性」を追憶し妄想を眼前に見ているのである。上田渡はこれらの描写に対して「江口が娘の唇に強い興味を示しながらも、触れるまでにいたらなかった事実にまちがいはない」とし、「＜唇＝女性器＞という暗示」を控えめに説くものの、同時に「江口が宿の女の与えた禁制に終始忠実であった」とする[23]。しかし江口は娘たちの唇にこのように自らの指を入れ、宿の女の禁忌をいともあっさりと破り続けている。宿の女は、老人たちが自らの自由になるように金を払った娘たちに対して、口の中に指を入れることを禁じたのではなく、明らかに交情行為そのものを禁じたのである。口唇に女性器の含意があることは、三人目の娘に対する江口の「この小さな娘の唇が性の味はひにぬれて動くころ」という表現に紛れもなく現れていよう。江戸期春本『文のゆきかひ』中に、「十五六の娘」は年長けた娘とは「陰門のやうすもちがひ」「吐姪うるほひ」がないとする指摘とまさに重なっている。川端は 1960 年代において、唇という代替物を用いてイメージを重ねることで濃密な性的描写を行い、既に日常から姿を失いつつあった旧仮名遣で表記され更に仮名が多用された表記法を用い、研ぎ澄まされた文によって見事に朧化するという技巧の極みを見せたのである。三島のいうように、「およそ言語による観念的淫蕩の極地」が試みられているのである[24]。

そして「きむすめ」である「眠れる美女」たちがその標のように江口に遺すのが口紅の赤である。指についた口紅を江口は第二夜の娘の前髪にこすりつけた。第四夜の娘の口紅で赤くなった指先、そして第五夜の江口のハンカチに付いた黒い娘の口紅。唇に浮く紅の赤さは血に繋がり、眠る娘の部屋の「深紅のびろうどのかあてん」に繋がっていく。唇から浮かび出る血の色は「きむすめ」の表徴として描かれていると読み取れよう。

眠る娘たちへの愛撫の中で江口が追憶し夢想する妄念は、「きむすめ」を失う娘や、乳の香りに導かれて子を孕む女へ、そして母として子を生み更に美しくなる女へと、そのあわいにいくつもの女の性的な身体の不思議を走馬燈のように次々と浮かび上がらせながも進んでいく。その先に来るのは、「それぢや、自分の最初の女は、だれだつたんだらうか」という問いであり、「最初の女は「母だ」」（p. 142）というひらめきであった。母は江口が 17 歳の冬に亡くなったが、その最期に江口が「胸をやはらかくなでたとたんに」多量の血を吐いて息が絶えたことを思い起こす。母の血は江口の襦袢の袖で拭われたのである。ちょうど、眠る娘たちの口紅の赤い色を江口老人がハンカチで拭ったように。唇から多量の血を溢れさせた母は「きむすめ」の体を持ち、聖性を帯びた存在である。そして

[23] 上田渡「川端康成『眠れる美女』論：幻想空間のパラドックス」（『信州豊南女子短期大学紀要』6、1989 年 3 月 1 日刊）

[24] 三島由紀夫「解説『眠れる美女』」（新潮文庫、昭和 42 年 11 月 25 日刊）

それは、第一夜の娘の胸を探ってそっと掌の中に入れた時に、「江口をみごもる前の江口の母の乳房であるかのやうな、ふしぎな触感がひらめいた。」という一文を想起させる。江口をみごもる以前、いまだ「きむすめ」であった母は、秘められた宿の最初の「眠れる美女」の中に既に息吹いていたのである。この第一夜の「きれいに合はせた娘の唇」から「目をそらせ」た江口老人は、彼女が「きむすめであらうと信じ」ざるを得なかったと同時に、「自分がこの娘から可愛いがられてゐるやうな幼ささへ心に流れた」（p. 40）のであり、母の傍らに蹲る少年に追憶が行き着くまで、妄念の世界をさまよわざるを得なかったのである。『眠れる美女』は「聖なる母憧憬」を今ひとつの主題としているといえよう。

「処女崇拝」と「聖なる母憧憬」という想念は、『文のゆきかひ』が著された江戸期には希薄なものである。「きむすめ」の価値はそれなりにあったが、それは「初なすび」や「初蕎麦」同様の 75 日命が延びるほどの「初物（はつもの）」としての価値であり、聖性を帯びるようなものではない[25]。また、聖母マリアの如く子を生み出す母に「処女」を求めることは、妖犬・八房との間に半妖の英雄である八人の子（犬士）を成した『南総里見八犬伝』のヒロイン・伏姫の懐妊の場をいかに神聖に描くかという工夫を自ら誇った曲亭馬琴の例以外、寡聞にして私は知らない。「処女崇拝」と「聖なる母憧憬」は、一見、明治期になってキリスト教が我が国にもたらした女性崇拝のようにも見えるが、明確に男性中心主義の性のとらえ方である。母の死のイメージは黒い娘の上に実際の死として現れ、母の唇から大量の血を溢れさせて自ら母を犯す妄念に行き着いた江口老人は、養生法の説くように、自らの精気を失わざるを得ない。遺された江口自身にも「死」はもはや身近なものであったろう。

5　マルケス『眠れる美女の飛行』

川端の『眠れる美女』に強い感興を催されたのは三島やサイデンステッカーに留まらない。1982 年にノーベル文学賞を受けたコロンビアの作家ガブリエル・ガルシア・マルケス Gabriel García Márquez からの、『眠れる美女』のモデルを紹介して欲しいという手紙を、これもノーベル賞（1994 年受賞）作家である大江健三郎が受け取ったが、これを断ったという逸話を大江が記している[26]。マルケスは『眠れる美女』が彼に与えた衝動を基に、短いエッセイ『眠れる美女の飛行』（*El avión de la bella durmiente*）を書き、さらに 1992 年には小説『眠れる美女の飛行』（*El avión de la bella durmiente*）に改稿して自らの短編集『十二の遍歴の物語』（*Doce cuentos peregrinos*）に収載した。

短編小説『眠れる美女の飛行』は、こんな話である。なおテキスト底本として、旦敬助訳の新潮社本を用いる[27]。

> 朝のパリのシャルル・ド・ゴール空港でニューヨーク行きの便に乗ろうとしていた私は、生涯で一番美しい女性を見かける。大雪の為に長時間の待ち時間を過ごし、よう

[25] 白倉敬彦『春画の色恋　江戸のむつごと「四十八手」の世界』（講談社学術文庫、2015 年 9 月 10 日刊）中の「水揚」「新鉢」を参照いただきたい。
[26] 大江健三郎『大江健三郎　作家自身を語る』（新潮文庫、2013 年 12 月 1 日刊）
[27] G・ガルシア＝マルケス、旦敬助訳『十二の遍歴の物語』（新潮社、1994 年 12 月 10 日刊）

> やく夜の八時に搭乗便が出発したが、私はファーストクラスの隣席にあの美女の姿を見出す。彼女は自らの席を整えると薬を飲み、フライトの間中、深い眠りの中に過ごした。私は隣席から年若い美女の眠る姿を見守り、彼女を揺り起こしたいという誘惑を感じるが、彼女は深く眠り続け、着陸の合図が付いた瞬間に目を覚ます。そして私に目を向けることもなく、輝く美しさで颯爽と去って行く。

主人公の「私」は隣に眠る美女の「魔法の呪縛」の中にあり、その思索は眠る美女から「一瞬たりとも抜け出ることができな」い。作中で「その前の春、私は川端康成の美しい小説を読んだところだった。京都の町人の老人たちが途方もない金を払って、町で一番美しい娘たちが麻酔にかけられて裸で眠るのを見つめながら一夜を過ごし、同じ床の中で愛の苦悩に悶えるという物語だった。娘たちを起こしても、触れてもならず、実際、彼らはそんなことはしようともしない。この快楽の精髄は彼女らが眠るのを見ることにあるからだ。あの晩、美女の眠りを見守りながら、私はこの老境の洗練を理解しただけでなく、それを十全に生きた。」（p. 76）と、『眠れる美女』との関係を述べている。マルケスにとっての『眠れる美女』は眠る娘たちへの愛の苦悩に悶える江口老人を描く物語であり、眠りという鎧を纏うことで触れることを禁じられた美女の姿によって、より掻き立てられる恋情の中に身を置く楽しみが『眠れる美女の飛行』で語られる。美女は「二十歳以上には見え」ない若い娘であり、男の傍らで「一度も目を覚ますことなく、寝息ひとつたてることなく、体の位置をわずかに変えることもなく」眠り続ける。老年の男と若い娘の、性的対象として見られながら性交そのものは禁じられた関係という、養生法に則った組合せがここでも取られている。しかしながら、この二人の間には男から眠る娘そのものへの強い関心が掻き立てられるのみで、娘からその見返りとしての身体的な快楽は一切与えられない。男の一方的な娘への恋慕の思惟が男の精神に一種の麻痺を生じさせ、「快楽の精髄」に導いている。男にとって中心となるのはあくまで娘であり、その娘を「瓦か石ころのように見て、自分自身を黄金や玉のように大切に扱うべき」という『医心方』に繋がる養生法の世界とは真逆の組合せとなっている。その結果、眠る美女を見つめ続けた男は鏡に映った自らの姿に対して「愛のもたらす荒廃がこれほどまでにひどいことに」（p. 76）仰天せざるを得ない。川端の『眠れる美女』と本作との隔たりはあまりに大きい。

6　マルケス『わが悲しき娼婦たちの思い出』

川端の『眠れる美女』のマルケスに与えた衝撃は、それだけでは終わらなかった。2004 年、マルケスの最後の小説となる『わが悲しき娼婦たちの思い出』（*Memoria de mis putas tristes*）が出たが、この長編小説は冒頭に『眠れる美女』の書き出し文である「たちの悪い…」という宿の女の言葉を置き、『眠れる美女』のオマージュとして書かれたことを表明している。長篇小説『わが悲しき娼婦たちの思い出』の梗概を記しておく。なお、テキスト底本は新潮社本（Fig. 9）の木村榮一による訳文を用いた。[28]

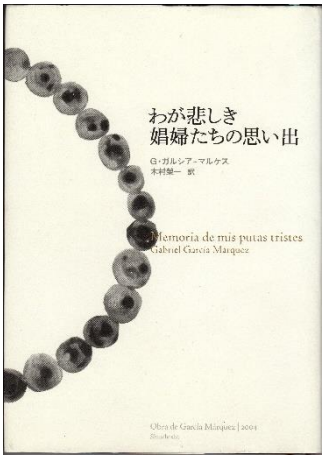

Figure 9

（1）

私は、新聞にコラムを書く仕事を今も続けているが、満 90 歳の誕生日の前日、うら若い処女との一夜を過ごして自らへ誕生日への祝いとしようと考える。古い友人で売春宿を経営する老女のローサ・カバルカスに 20 年振りに電話をして紹介を依頼し、売春宿の一室を訪れると、ぐっすりと眠っている 14 歳の少女がいた。その裸の少女に私はデルガディーナの歌を歌ってやり、翌朝、眠ったままの少女を残して帰宅する。

（2）

私はコラム執筆を引退する意向を持っていたが、新聞社では大勢に誕生日を祝われる。ローサからの電話で、昨夜の少女が初めての体験で男から何もされずに帰られたことで動揺していることを告げられる。また既に時代遅れであると思われていたコラム執筆を編集長から継続するよう要請され、さらに誕生祝いに貰った扱いにくい猫を引き取った私は、今一度、ローサの招きに従って少女に会いに行く。

（3）

私はベッドに眠る少女を見守り、歌を歌ってやり、彼女をデルガディーナと呼ぶことにする。私は少女に初恋を経験していた。ローサの宿のベッドで素裸ですやすやと眠るデルガディーナを見つめ、部屋を自分の好みの品で飾り、眠る少女に自らのさまざまな思いを語りかけ、明け方に帰宅した。私はコラムで愛を語り、コラムは人々の人気を集めるようになる。ローサは私が少女に結婚を申し込んだ方が経済的だというが、

[28] G・ガルシア=マルケス、木村榮一訳『わが悲しき娼婦たちの思い出』（新潮社、2006 年 9 月 30 日刊）

私は断る。私はクリスマスに高級自転車を贈り、宿ではデルガディーナの全身を愛撫しながら歌を歌ってやり、恋の時を過ごす。

（4）

新しい年には、私は眠っている少女と、目が醒めた状態で少女と一緒にくらしているように理解しあえていた。しかし、ある日、ローサの宿で銀行家が殺され、ローサは身を隠す。私は行方の分からなくなった少女を求めて町を動きまわるが見出せず、極度の不安の時を過ごして衰弱する。私は恋煩いで死ぬような苦しみを味わう。

一ヶ月後、ようやく私はローサの宿の少女が眠る部屋を訪れる。しかしそこに裸身で眠っていた少女はかつての姿と異なり別人のように美しく成長しており、安物の香水を付け、高価な宝飾品を身に付け、けばけばしい衣装を置いていた。「売春婦じゃないか」と私は怒り、部屋をめちゃめちゃに破壊する。ローサは、それは嫉妬からの勘ぐりであり、少女を美しく飾る衣装や宝石はローサが貸したものだと述べた。私は二度とこの店に足を踏み入れないと言って帰宅する。

（5）

私は食事も喉を通らず、痩せて気分も落ちつかず、不安定な精神状態で過ごす。しかし出逢った昔なじみの娼婦から、「その子を手放してはダメ」と言われ、ローサを訪れる。壊した部屋の賠償として私はローサから高額な請求を受けて一文無しとなったが、又、少女に会い、許しを請うキスをした。私は経済的に破産状態だったので死んだ母の宝石類を売りに行くが、宝石店で、母が既に模造品に変えていたことを知る。７月には、死が間近に迫ってきたと感じる。私は涙もろくなった。少年時代にはじめて性の交わりを持った売春宿を兼ねたホテルを尋ねて往時を思い出し、さまざまな妄念が浮かび上がる町を彷徨する。私は身近に逼った死を感じるが、医者からは健康だと言われる。91 歳の誕生日の前日、私はローサに頼んでデルガディーナと一夜を過ごす。一緒にあの世へ旅立とうと思ったが、夜明けを迎える。翌朝、ローサと話し合い、自らの死後、少女を経済的に援助できるようにしようとするが、ローサも私と共に少女を助けようと語る。そして少女が自分に「首ったけ」であると告げる。私は、百歳まで活きて幸せに死ぬだろうという幸せな思いを抱いて生きていく。

このように、本作では、『眠れる美女』の「江口老人」は主人公の「私」、秘められた「宿の女」は町の売春宿の経営者である「ローサ・カバルカス」、そして「眠る娘たち」は「デルガディーナ」と私によって名付けられた一人の少女に移し替えられている。登場人物の対応のみならず、本作でも「処女（きむすめ）」は「私」にとって少女の重要な属性として描かれる。物語は、「満九十歳の誕生日に、うら若い処女を狂ったように愛して、自分の誕生祝いにしようと考えた」（p. 12）という実に魅力的な言葉ではじまり、ローサに紹介される娘は「乙女でないといけない」のであり、ベッドを占領して眠る娘を見て「この子は間違いなく処女だと感じ」ている。私にとっての 90 歳の祝いに値する娘は「処女」でなければならなかった。そして更に、「私」の母は、「フロリーナ・デ・ディオス・カルガマントスという名の娘はモーツァルトの演奏家として知られ、数カ国語に通じ

ていて、ガリバルディの信奉者でもあった。いまだかつてこの町で見かけなかったほどの美貌と才能に恵まれた」（p. 14）女性であり、容貌に恵まれない私は、若くして亡くなった美しく才能豊かで優美な母を思い続け、死後には母親の声をまぼろしに聞き、母の母語であるイタリア語の辞書を座右の書としている。私にとって母は神聖で他のいかなる女性よりも洗練された存在である。すなわち『眠れる美女』同様に、『我が悲しき娼婦たちの思い出』にも、「処女崇拝」と「聖なる母憧憬」という主旋律が息づいている。このように本書は、『眠れる美女の飛行』とは異なって、川端の『眠れる美女』に遥かに近く、コラージュ作ともいえよう[29]。しかしこの物語で語られるのは、『眠れる美女』で見られた眠る娘を通して追憶される老人の過去の女たちの思い出ではなく、眠るデルガディーナそのものへの「私」の「恋」である。「眠る娘」に対して、前作の『眠れる美女の飛行』では「私」はひたすら恋心に苦しむが、睡眠中の娘は私の感情とは無関係に存在し、去って行く。『我が悲しき娼婦たちの思い出』では、私の恋情によって娘を含めた事態が動く。デルガディーナを恋することで、手に入れた「私」の新しい人生の一年間が、91 歳の誕生日から振り返って記録されているのである。

養生法の観点から見るならば、ここでも「老人と性的対象としての少女との性交を伴わない関係」が描かれている。老齢の「私」は性的能力をいまだ持っているが、「性的能力は私自身ではなく、女性に依存して」おり、第一夜のデルガディーナとの交情行為を試みるが、熟睡する娘は「両脚を固く閉じ」、「私」は目的を達せられない。以後、眠る娘の傍らにあることに歓びを見出し、処女である娘への恋に没頭する。恋の力によって、「私」は若返り、その仕事も輝き、世の注目を浴びる。すなわち、年老いた男が性交そのものを避けつつ年若い少女によって精気を与えられているわけで、養生法に正しく則った関係が保たれているのである。

では、この物語で語られているのは眠る少女への老人の恋と、そこから得る新しい精気に満ちた人生なのであろうか？物語はそれほど単純には進まない。「私」の恋情を辿れば、私が恋しているのは「デルガディーナ」と名付けられた架空の少女でしかないことが明確になる。最初の夜、私は眠る少女の耳元で『デルガディーナのベッドの周りは天使で一杯』を歌う。このメキシコのコリード（corrido）である「La Delgadina」は、悲劇的な死を迎えた王の娘のデルガディーナを主人公とするが、この歌に浄化されて眼前の貧しい娘は王女に変身し、第二夜から、私は少女をデルガディーナと呼ぶようになる。そしてこの変名によって、少女は私の想像の中で自由に変身していくのである。「自分の好きなようにイメージを作り替えることが出来るようになった。自分の精神状態に応じて彼女の目の色を変え」（p. 69）、年齢と仕事を変え、それに合った服を着せていく楽しみが始まる。「私」は実際の少女をも「私」の好みに合わせようとする。部屋をピンク色に塗り、花瓶に花を活け、母の遺した素晴らしい絵を掛け、ラジオを持ち込み、その周波数をクラシック音楽の放送局に合わせておく。このように、「私」は母に似通った聖的な少女を空想の中で作り上げ、その少女に激しく恋をしているのである。では、実際にはどのような少女

[29] 花方寿行「ガブリエル・ガルシア=マルケス『我が悲しき娼婦たちの　思い出』と川端康成『眠れる美女』：コラージュと変奏」（『翻訳の文化/文化の翻訳』（静岡大学人文学部翻訳文化研究会、2006 年 3 月 31 日刊）では、二作品の詳細な比較考察が行われている。

だったのだろうか？最初の夜、眠る少女は素顔が分からぬほどの厚化粧をし、バスルームには安物の服や安価な化粧品が並べられていた。寝言の声は「粗野で品のない」ものであり、読み書きもできず、ラジオの周波数はいつのまにか流行のボレロ音楽の局に変えられている。そして私は、「眠っている彼女の方がすきだ、そう考えたとたんにすべての迷いが吹っ切れた」（p. 87）と、現実の少女と恋の相手とした少女の乖離を認め、現実の少女を切り捨てている。このような「私」のデルガディーナへの恋は、娼婦として身を売ろうとしたほどに貧しいデルガディーナ自身によっても支えられている。少女は、最初の夜も次の夜も睡眠薬で眠っていたが、明け方に目覚めても「私」を起こすことはなく、それ以降もベッドの中で眠り続ける役柄を引き受け、私の夢想を横から支えているのである。殺人事件のあった夜でさえ、「私」は少女を置いて帰宅し、少女は眠り続ける姿しか私に見せていない。「私」は「恋する男」というイメージを、眠る少女を通じて作り上げ、それによって日々の活気を得ているのであり、少女は直接的に「私」に働きかけることは何もない、一方的な関係が保たれているのである。少女の 15 歳の誕生日、「私」は少女の全身に隈無くキスしていく。キスに連れて、少女の「身体が熱くなり、野生の香りがしはじめ」、「新たなうめき声がもれ」、「触れてもいないのに乳首が大きく花開いた」（p. 82）。少女はあきらかに性的な興奮状態に入っている。しかし、私はそれ以上の行為に出ず、明け方にバスルームに「いとしいデルガディーナ、降誕祭のそよ風が吹いてきたよ」と書いて帰宅する。このような二人の間の恋は、男の為にのみある極めて独善的な妄想の世界のものではないだろうか。

しかし物語の最後で、91 歳になった「私」は笑い転げるローサから「あの子はあんたに首ったけよ」（p. 126）と言われ、「本当の私の人生」が始まる。この結末を、花方寿行は「死へと向かうネクロフィリアックなエロティシズムが濃厚な『美女』の基本設定を借りながら、正反対の再生の歓びを、あっけらかんとうたいあげたところにこそ、マルケスのしたたかさが窺える」とし[30]、木村榮一は「老人は自分の愛が報われたと知り、浮き立つような思いで家路につくところでこの小説は終わっている」[31]と述べる。「私は百歳を迎えたあと、いつの日かこの上ない愛に恵まれて幸せな死をむかえることになるだろう」（p. 127）という掉尾の言葉をそのままに受け入れ、幸せな老人の話としての読み方は海外に於いても広く受け入れられているようである。しかし、私はこの唐突な結末に大きな違和感を感じずにはいられない。「私」の 91 歳の誕生日の朝[32]のローサの宿での会話…、「私」は「この家のすべてを私が買い上げるよ」というが、「私」は壊した部屋の賠償金により破産状態の筈である。又、ローサの「あんたの財産と私の財産すべてをあの子のために遺してやるのよ」という言葉に値するほどの価値を、デルガディーナと仮名された娘は持っているのか？ローサは多くの未成年の少女を売春宿で働かせており、「私」が眠る少女に手を出さなかったことに対して他の少女を紹介すると言い、眠る娘に金を出し続けるよりも、結婚した方が安上がりだと薦めている。ローサには、殺人事件のあった後、し

30 同前

31 木村榮一第十四章　晩年の小説二編　川端康成『眠れる美女』を読んで（『謎ときガルシア=マルケス』新潮選書、2014 年 5 月 23 日刊）

32 木村榮一訳では、この p. 125 の「私」の年齢を一歳ずつ年上に誤訳しており、物語に大きな齟齬が生じている。

ばらく身を潜めるようにと忠告する知人もいる。彼女はひとりぼっちではなく、デルガディーナは扱っている年若い売春婦の一人に過ぎない。そしてデルガディーナ自身も、眠り続ける役を演じてきた身であり、その前の夜には部屋を破壊されている。そんな少女がどうして「首ったけ」になり得るのであろうか？ここには幾重もの無理がある。

分岐点は、「私」が眠る少女の部屋を破壊した時にあるのではないだろうか。殺人事件の後、久しぶりであった夜、デルガディーナは、別人のように成長して美しくなっている。肉体の美しさの他に、つけまつげやマニキュア、安物の香水や高価な装飾品が彼女を飾り、椅子の上にはスパンコールと刺繍入りの夜会服に繻子の靴が置かれている。「私」は「これじゃ売春婦じゃないか」（p. 102）と叫び、部屋を打ち壊していく。現れたローサから、それは嫉妬が起こす「見事な勘繰り」であり、真実はひどい格好をしていた少女を美容院に行かせ、飾り立てたのだと言われる。「私」はローサの店に二度と来ないと告げ、ローサは部屋を弁償するよう声を掛ける。果たして、「私」はローサの弁解を信じたのだろうか？又、実際は何が起こったのか？少女は明らかに女性的な肉体となり、ローサが身に付けていたとは思われない安っぽい身体の飾り方をしている。明らかに少女は処女ではなくなり、聖なるデルガディーナは消え去ったと読めるのではないだろうか。そしてこの事態は、今ひとつの聖なる物をも破滅していく。「私」がめちゃめちゃにした部屋の高額の弁償金のために、「母が一番愛していた絵の一枚」を手放すが、一財産手に入る筈のその絵は売却すると十分の一にもならず、弁償を終えると「私」は「文字通り一文無しのすってんてん」に陥る。破産状態の「私」は追い詰められ、「母親の遺した神聖な宝石類」を売りに行くが、それらは既に母の手で生前に偽物に変えられた品であった。眠る少女の「処女喪失」は、聖なる母の消失を導き、「私」の精神を追い詰めていったのではないだろうか。「私」の 91 歳の誕生日の狂気に似た歓びは、『眠れる美女』の江口老人がそうであったように、老人の「死」を暗示しているように、私には思える。

性的対象でありながらも性的交情を持たないという養生法に見る老人と年若い娘との関係は、相手をあくまで即物的に捉えることで成り立つものである。自らの精神世界に沈潜し、交情相手を「個」として捉える川端とマルケスの世界では、この老人と年若い娘の関係は、至福のときめきと同時に崩壊へと導く諸刃の剣となり得るのではないだろうか。

文献目録

原文

KAWABATA, Yasunari 川端康成 (1960): *Nemureru bijo* 眠れる美女. Tōkyō: Shinchōsha.

TANBA, Yasuyori 丹波康頼 (1978 [984]): *Ishinpō: Bōnai hen* 医心方：房内篇. Tōkyō: Shuppan kagaku sōgō kenkyūjo.

TANBA, Yasuyori 丹波康頼 (2004 [984]): *Ishinpō: Kan 28* (*Bōnai hen*) 医心方： 巻 28 （房内篇）. Bearb. MAKI, Sachiko 槙佐知子. Tōkyō: Chikuma shobō.

研究文献

HANAGATA, Kazuyuki 花方寿行 (2006): „Gaburieru Garushia Marukesu [= Gabriel García Márquez] ‚Waga awareshiki shōfu tachi no omoide' to Kawabata Yasunari ‚Nemureru bijo': Korāju to hensō ガブリエル・ガルシア=マルケス『我が悲しき娼婦たちの思い出』と川端康成『眠れる美女』：コラージュと変奏". In: *Hon'yaku no bunka – bunka no hon'yaku* 翻訳の文化/文化の翻訳. Shizuoka: Shizuoka daigaku jinbun gakubu hon'yaku bunka kenkyūkai: 21–43.

ISHIGAMI, Aki 石上阿希 (2015): „Chūgoku yōjōsho to enpon ‚Kōso myō ron' no juyō wo chūshin ni 中国養生書と艶本『黄素妙論』の受容を中心に". In: *Nihon no shunga – enpon no kenkyū* 日本の春画・艶本研究. Tōkyō: Heibonsha: 55–89.

ITASAKA, Noriko 板坂則子 (2015): „Ikku ‚Fumi shinan' to Yōki sanjin ‚Fumi no hayashi': Fu Ōrai bubun honkoku 一九『文しなん』と陽起山人『文のはやし』：附往来部分翻刻". In: *Senshū kokubun* 専修国文 97 (Sept.): 1–56.

KIMURA, Eiichi 木村榮一 (2014): *Nazotoki Garushia Marukesu* [= García Márquez] 謎ときガルシア=マルケス (Shinchōsha sensho 新潮選書). Tōkyō: Shinchōsha.

KOBAYASHI, Yoshihito 小林芳仁 (1981): „‚Nemureru bijo' to koten to no kankei 『眠れる美女』と古典との関係. In: *Kawabata Yasunari kenkyū sōsho: Makai no hōkō* 川端康成研究叢書：魔界の彷徨. Tōkyō: Kyōiku shuppan sentā: 63–81.

KOYANO, Atsushi 小谷野敦 (2013): *Kawabata Yasunari: Sōmen no hito* 川端康成伝： 双面の人. Tōkyō: Chūō kōron sha.

MACHI, Senjūrō 町泉寿郎 (2012): „Kinsei Nihon no igaku ni miru ‚manabi' no tenkai 近世日本の医学にみる「学び」の展開". In: *Nihon kanbungaku kenkyū* 日本漢文学研究 7 (2012.3): 53–78.

MÁRQUEZ, García Gabriel [G. Garushia MARUKESU G・ガルシア＝マルケス] (1994): *Jūni no henreki monogatari* 十二の遍歴の物語 [*Doce cuentos peregrinos*, 1992] (*Shinchō gendai sekai no bungaku* 新潮現代世界の文学). Übers. DAN, KEISUKE 旦敬介. Tōkyō: Shinshōsha.

MÁRQUEZ, García Gabriel [G. Garushia MARUKESU G・ガルシア＝マルケス] (2006): *Wa ga kanashiki shōfu tachi no omoide* わが悲しき娼婦たちの思い出 [*Memoria de mis putas tristes*, 2004] (*Shinchō gendai sekai no bungaku* 新潮現代世界の文学). Übers. KIMURA, Eiichi 木村榮一. Tōkyō: Shinshōsha.

MISHIMA, Yukio 三島由紀夫 (1967): „Kaisetsu ‚Nemureru bijo' 解説「眠れる美女」. In: 「眠れる美女」(Shinchō bunko 新潮文庫): 194–200.

MISHIMA, Yukio 三島由紀夫 (1970): „‚Nemureru bijo' ron 「眠れる美女」論. In: *Kokubungaku kaishaku to kyōzai no kenkyū* 国文学解釈と教材の研究 15(3) (Feb.): 20–21.

ŌE, Kenzaburō 大江健三郎 (2013): *Ōe Kenzaburō sakka jishin wo kataru* 大江健三郎作家自身を語る (*Shinchō bunko* お-9-23). Bearb. OZAKI, Mariko 尾崎真理子. Tōkyō: Shinchōsha.

SAKADE, Yoshinobu 坂出祥伸 (1993): *„Ki“ to yōsei: Dōkyō no yōseijutsu to jujutsu* 「気」と養生：道教の養生術と呪術. Tōkyō: Jinbun shoin 人文書院.

SHIRAKURA, Yoshihiko 白倉敬彦 (2009): „Nikuhitsu shunga ni tsuite 肉筆春画について“. In: *Nikuhitsu shunga* 肉筆春画 (*Bessatsu Taiyō* 別冊太陽). Tōkyō: Heibonsha: 4–5.

SHIRAKURA, Yoshihiko 白倉敬彦 (2015): *Shunga no irokoi: Edo no mutsugoto ‚Shijūhatte‘ no sekai* 春画の色恋：江戸のむつごと「四十八手」の世界 (Kōdansha gakujutsu bunko 講談社学術文庫 2319). Tōkyō: Kōdansha.

UEDA, Wataru 上田渡 (1989): „Kawabata Yasunari ‚Nemureru bijo‘ ron: Gensō kūkan no paradokkusu 川端康成『眠れる美女』論：幻想空間のパラドックス“. In: *Shinshū hōnan joshi tanki daigaku kiyō* 信州豊南女子短期大学紀要 6 (Mrz.): 105–117.

YOSHIHARA, Akira 吉原瑛 (1998): „Edo jidai yōjō sho shuppan nenpyō 江戸時代養生書出版年表“. In: *Gunma daigaku kyōiku gakubu kiyō*: *Geijutsu – gijutsu seikatsu kagaku hen* 群馬大学教育学部紀要：芸術・技術・生活科学編 33: 119–125.

インターネット資料

KAIBARA, Ekiken 貝原益軒 (2016 [1834]): *Yōjō kun* 養生訓. http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ya09/ya09_00705/index.html (zuletzt aufgerufen: 17.05.2016).

MINASE, Dōsan 曲直瀬道三 (2016 [17c]): *Ōso myōron* 黄素妙論. http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541834 (zuletzt aufgerufen: 17.05.2016).

TANBA, Yasuyori 丹波康頼 (2016 [984]): *Ishinpō* 医心方. http://www.emuseum.jp/detail/100173/000/000%3Fmode%3Ddetail%26d_lang%3Dja%26s_lang%3Dja%26class%3D%26title%3D%26c_e%3D%26region%3D%26era%3D%26century%3D%26cptype%3D%26owner%3D%26pos%3D49%26num%3D2 (zuletzt aufgerufen:17.05.2016).

付記

本稿は平成 26〜28 年度科学研究費助成事業　基盤研究（C）「テキスト面からみた春本研究…戯作者と春本」（課題番号 26370246）の研究成果の一部である。

川端康成とマルケスについて小谷野敦氏の示教に預かった。記して感謝申し上げます。

a) 図版

Fig. 1　『眠れる美女』（新潮社、1961 年 11 月 30 日）、架蔵本、表紙

Fig. 2　『眠れる美女』（新潮社、1961 年 11 月 30 日）扉部の川端康成サイン

Fig. 3　『医心方　房内篇　原文』（出版科学総合研究所、1978 年 6 月 20 日刊）』

Fig. 4　『艶道通言　ふみのゆきかひ』表紙、架蔵本

Fig. 5　『艶道通言　ふみのゆきかひ』見返し・叙文

Fig. 6　『艶道通言　ふみのゆきかひ』口絵

Fig. 7　『艶道通言　ふみのゆきかひ』26 丁裏・27 丁表

Fig. 8　『艶道通言　ふみのゆきかひ』28 丁裏・29 丁表

Fig. 9　『わが悲しき娼婦たちの思い出』（新潮社、2006 年 9 月 30 日刊）、架蔵本、表紙

b) 表

表一　「文のはやし」上部頭書部

表二　「文のはやし」下部艶書部

表１「文のはやし」（上段頭書部）

類	書名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
第一甲類	文しなん	恋のみちびき2オ	口上4ウ	文を付てきつと返事のくるでん7オ	しのひくるやうにしたゝめやりてきつとくる文のひでん9ウ	むざうさにいろごとをするでん12オ	数女に会してせい汁をもらさぬひてん薬13ウ	房中の妙薬15オ	男女交合禁忌の事19オ	人にひろはれても恋としれざる文21ウ	よばいをするにいきづかいの音せぬひてん22ウ	女にほれらるゝ伝23オ	男女交合秘伝24オ	九勢之要術26ウ			
第一乙類		色事のできる伝2ウ															
第二類	文のはやし	はじめて文をやるときのこゝろえ3ウ	淫婦の目利しやう5オ	とこにて女をなかせやうでんじゆ7ウ	二ばんつゞき交やう9オ	手入らずのむすめに初めて情をうつさする伝10ウ	勤の女に情をうつさするしやう12ウ	としま女のこしをぬかすでんじゆ14オ	唐人流犯しやう16ウ	犯して孕まざる伝18オ	情なき女におもひつかすでんじゆ21オ	とこにてなかぬ女を泣やうにしこむでん23ウ	けいせいにほれさするでんじゆ25ウ	荒淫の女を一度にてこりさせる伝28ウ			
第三甲類	恋の山ぶみ　文の枝折	交合心得方2ウ	闇中の心得6ウ	としま女のこしをぬかすでんじゆ7オ	とこにてなかぬ女を泣やうにしこむでん10オ	けいせいにほれさする伝じゆ12ウ	情なき女におもひつかすでんほふ16ウ	いんらん女を一どにてこりさすでん19ウ	唐人流犯しやう24ウ	はやわざの伝26オ	おかしてはらまざるでん27オ						
第三乙類		女大学1ノ2ウ「婬男亭好成著」	娘を口説伝8オ	後家を口説やう9オ													
第四類	艶道痛言　ふみのゆきかひ	男女和合の事1オ	年ゆかぬ娘をくどき落す伝4ウ	泣ぬ女をなくやうに仕こむ伝9ウ	大どしままたうばを犯す伝14オ	子をはらむ説19ウ	老人養生の法26ウ	女を口説でん32オ	女の書たるものにてその心いきをしる法40オ	女の闇へしのぶ法42オ							
第五類	続文のはやし	男女一代心得の哥2ウ	女に文のやりやう10ウ	はじめて遣こいのうた11ウ	娘一ばんされると其男を朝晩こがるゝ伝12ウ	右四種各細末也14ウ	女こゝろへの事16オ	まらのよしあしをしること18ウ	三人の女を忍きをやらせる伝21オ	交合妙薬法22オ	玉門ひろきをせばくする薬23ウ	玉茎ふとくするくすり24オ	男のゐんをもらさぬ薬24ウ	仕様の達者25オ	かげまをしこむ伝授26オ	手にいらぬ後家をする伝27オ	「ながく夜の開のねばりの気やり初めかり高まらのあじのよきかな」35ウ
第六類	ちらしの千話文（合綴本）	夫婦和合の亘1ウ	淫婦の相を知事6ウ	玉門の差別8ウ	陰茎の差別14ウ	女悦妙薬伝16オ	交合五傷の亘19ウ	淫乱を治す伝20ウ	婦人の心得の亘24ウ								
第七類	新はん　ふみのはやし	交合の始り　附いろ／＼の法3オ	五勢之要法5ウ	三技之要術9オ	四先の秘訣15オ												
第八類	文の文庫	はじめて文をやるときのうらない2ウ	女にはやくおもひつかるゝ秘伝3ウ	入痣薬の法4オ	諸国色里價附6オ	女悦道具早拵法10ウ	文を送りてあらはれぬよふにする伝13オ	悪性の男をこらす呪の法14ウ	目悟き女の目覚ぬましない事15オ	陰房を深く行とも長命なる伝受18ウ	交合に色々の仕かたある事23オ	手入らずの娘をだまし犯すでん32オ					
第九類	艶道文の真砂	艶道龍壺伝1オ															
第十類	恋の山ぶみ　文の枝折	末摘花2オ	八曲之次第8ウ	末摘花※冒頭部から	おもふ人をよび出すの法17オ	女にほれらるゝの秘伝18オ	わが思ひをゆめにしらする法20オ										

表２「文のはやし」（下段艶書部）

類	書名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
第一甲類	**文しなん**	きつと色事のできる附文2オ	同返事5オ	最初の附文にて返事のおそき時追かけて遣す文8オ	右の文に相答の返事13オ	ばんにさせようからきなさいといふ文17ウ	同返事20オ	別れし後遣す文21オ	うらみの文24ウ	末を契る文29オ										
第一乙類																				
第二類	**文のはやし**	はじめてのつけ文3ウ	同返事5ウ	おなしく断の返事7オ	あふてわかれしあとのふみ（10ウ）	同返事13オ	はら立てあはぬかたへつかはす文16オ	うらみ申遣す文20オ	つれなき人へつかはす文23オ	遠く道へたてたるかたへつかはす文26ウ	同返事31オ	きれ文の事34オ								
第三甲類	**恋の山ぶみ　文の枝折**	はじめてつけ文2ウ	女返し4オ	見初し娘に遣す文5オ	同じく返事6ウ	主ある妾へおくる文9オ	同返事10ウ	逢て後やる文12ウ	女返し14オ	文もどされて又つかはす15ウ	雨やどりせし女のもとへ17オ	女返し18ウ	むすこかぶへおいらんよりおくる文19ウ	男かへし22オ	つれなき人え遣す文24オ	遠く道へだてゝこがるゝかたへ遣す文26オ	同返事29オ			
第三乙類																				
第四類	**艶道痛言　ふみのゆきかひ**	男より女へ始めてやるふみ1オ	おなじく返事3ウ	あひて後女より男へおくる5オ	心替りにやと思ふ女へ恨みいひつかはす6ウ	同じく返事8オ	後家のかたへ始めて男よりつかはす10ウ	同返事12ウ	つれなき女の許へおくる14ウ	同返事17オ	心替りしたる男へつかはす18ウ	奥勤の女へおくる20ウ	同返事23オ	深く契れる女の方より真身の事をいひこす27ウ	せかれたる女の許よりいひこす32ウ	同返事36ウ	女より男へおくる起請40ウ	男より女へ遣はす起請42ウ	きれ文の事43ウ	
第五類	**続文のはやし**	はしめて遣す文2ウ	女返し5オ	男おして又遣すふみ7オ	からかさの゛にし文9オ	13オ女返し	てかけに遣す文17オ	女かえし19ウ	後家に寄るふみ22オ	おなじく返事25ウ	源氏に寄るつけ文27ウ	おなじく返じ32ウ	おたふく面と松茸図35ウ							
第六類	**ちらしの千話文（合綴本）**	はじめてつけ文3ウ	おなしく返事5オ	あふて後に遣はす文6オ	おなしく返事7オ	うらみ申遣はす文8オ	同しく返事9ウ	絶てあはざるかたへ遣す文10ウ	おなしく返事2オ	やくそく申遣す文13オ	心かはりせし方へ遣す文14オ	おなしく返事16オ	はら立たる人のかたへ遣す文17ウ	おなしく返事19ウ	きれ文の事21オ	遠くへたてたるかたへ遣す文22オ	おなしく返事25オ	附文ことはりの文28オ	ことはりのかたへふたゝび申つかはす文29ウ	同しく返事31ウ
第七類	**新はん　ふみのはやし**	初て思ふ女のもとへ贈る文	同返事6オ	右の返事を見て又おつて贈るふみ8ウ	今宵忍び来るやうにいひおくるふみ10ウ	同じく返辞11オ	宮つかえの女に贈るふみ13ウ	同返事17ウ	遠くへだゝりたる男のもとへ贈る文20オ											
第八類	**文の文庫**	娘の許へおくる文2ウ	おなじく女かへし4オ	江戸芸者にやる文6オ	同芸者の返し8オ	後家にやる文9オ	同後家よりの返し11ウ	江の嶋詣より恋の文14オ	同か゛し15ウ	芝居にて見初る文19オ	同かへし21オ	遊女へ口舌の後の文22ウ	御殿女中へ遣す文25オ	同かへし30オ						
第九類	**艶道文の真砂**	見初たる女におくる文1オ	同返事3ウ	逢て後女より送る文5ウ	同返事8オ	後家へ送る怨みまじりの文10オ	同返事14ウ	心かはりの男におくる文16オ	同返事20オ	手堅き女を強て口説文22ウ	同返事25オ	待せて来ぬを恨むる文28オ	傾城より客へ送りたる文の返事30オ	傾城よりおくる真の文32ウ	逢て後遠ざけられたる女の許よりおくる文36オ					
第十類	**恋の山ぶみ　文の枝折**	見そめて娘におくる文2ウ	むすめかへし4ウ	こしもとへおくる文6ウ	同女返事8オ	人の女房へおくる文10オ	同女かへし12オ	逢初て後娘へおくる文14オ	同娘へんじ15ウ	尼法師におくる文17オ	おなしく返事19オ									